

# イギリスにおける美術による地域活性化の事例について

中野 良寿

A Case Study of Community Revitalization by fine art in the U.K

NAKANO Yoshihisa

(Received January 8, 2013)

キーワード：美術機関、地域連携、環境教育、ロンドン、エジンバラ、オークニー諸島

## はじめに

本研究は美術による地域活性化の事例研究および、地方都市における美術活性化のモデルの構築を目的に行われている。2010年のカナダにおける事例報告<sup>(1)</sup>につづき、2011年9月にイギリスにおける事例を調査した内容について記述する。この調査旅行の数ヶ月前に東日本大震災がおこったこともあり、美術と地域振興、美術機関の連携という内容に加えて、環境への配慮という要素も研究内容に盛り込めないかと考えた。その結果以下のような場所への調査となった。

- 1) ロンドン：a, テート・ギャラリー(グリーン部門)、b, アーティストスタジオACAVA
- 2) エジンバラ：a, エジンバラ・カレッジ・オブ・アート(ECA)
- 3) オークニー諸島：a, ピア・アート・センター、b, ヨーロピアン・マリーン・センター(EMEC)

上記の場所では地域の活性化のためにそれぞれの機関が貢献しているとともに、旧来のカテゴリーを少しずつ逸脱することにより、異業種間の連携関係を模索している現状があり、或る程度の成果を出しつつある状況であった。

## 1. 調査地の概要

### 1-1 ロンドンにおける事例

#### 1-1-1 テート・ギャラリー(グリーン部門)

テート・ギャラリーは現在イギリスの3都市, 4カ所にあるイギリスを代表する美術館である。それぞれ次のように呼ばれている。テート・ブリテン(ロンドン)、テート・モダン(ロンドン)、テート・リヴァプール(リヴァプール)、テート・セントアイヴス(セントアイヴス)。本調査では母体となるテート・ブリテンに訪れた。

特に本稿ではテート・ブリテンにあるテート・ギャラリーのグリーン部門についてテート・ギャラリーが発行している小冊子(Tate Going Green)をもとに記述する。この「グリーン部門」とはテート・ギャラリーの運営における環境政策部門であり、環境保全を考慮した持続可能社会への対応を戦略的に行おうとするものである。

全体の問題意識として、ギャラリー自身が社会および環境への配慮という内容に関して、より責任を負うということを積極的に請け負っていくということであり、壊れやすく繊細な世界の環境により負荷のかからないようなインフラストラクチャーおよび展示内容など、幅広く、環境へ配慮していくという内容である。小冊子には次の3つの方針が示されている。

A: テート・ギャラリーはこの環境問題についてどのように対処しているか。

B:テート・ギャラリーはどのように環境に関する知識と経験を他の美術館、博物館、ギャラリーと共有しようとしているか。

C:テート・ギャラリーはどのように自己組織および他の組織にこの環境問題について挑戦しているか。

Aについては美術館運営がビジネスとしてどのように行われているのか、多くの部門が意識的にこの環境への配慮という問題について実践されているかが問われている。すでに“グリーン・チャンピオン”という名称のボランティアを組織して、職場においてこの環境への配慮の実践に改良を加えているところである。

具体的に、オフィスを含む電力の削減、ギャラリーのライティングや機材の使用方法、会議への個々の移動手段について環境のことを意識した方法を選ぶことがそれぞれの構成員に意識づけられるような活動を行っている。

Bについては美術館やギャラリーなど他の美術機関との環境に関する知識や、実践の経験を学んだり、伝えることで優れた知識や経験を共有し、それぞれの機関が連携をとることで、環境に対する実践を促進させている。例えば、展示室の効率的な空調について、他のギャラリーと情報交換して効率的なシステムを導入する等している。

また、展示用に設置する壁の再利用についても考慮したり、作品搬入搬出などの低炭素化についても効率的な方法を模索している。さらに時事的に行われるイベントでの食事などの食べ残しの削減、来客者などの送迎には公共機関を利用する等、様々なアイデアが試みられている。

Cについては将来、テート・ギャラリーの新しい建物が環境に負荷が少なく親密性をもったものとなるよう、アーティストや科学者の他、一般の人々の意見も取り入れながらよりよい施設をもつ美術館の構築を目指している。新しい建物については環境に配慮した建物として世界的な指標を考慮に入れ、現在の一般的な美術館とくらべてエネルギー効率が54%削減できるように、低炭素効率については44%削減できるような指標を設けている。また、自然の熱や光を効率良く館内の空調や調光に生かしたシステムの導入も考えられている。(図1-2)



図1 テート・ブリテン外観



図2 グリーン部門についての説明(テート・ブリテン内の会議室にて安原雅之氏とジュディス・ネスビット氏)

### 1-1-2 アーティストスタジオACAVA (Association for Cultural Advancement through Visual Art)

1999年にロンドンで建設されたアーティスト用のスタジオビルであり、ACAVAのオフィスも併設され、現在でもロンドンの非常に貴重なスタジオ例である。ビル内には21部屋のアーティスト用のスタジオがある。他にハロウド・ワークスにスタジオAPTがあり、母体となるのは1972年に設立されたスタジオACMEというアーティストスタジオである。このスタジオは、ロンドンに多数住むアーティストたちの制作場所となっており、毎年多数輩出される美術系大学の卒業生などにとってはまたとない活動の拠点となっている。通年を

通しての制作の場所としてはもとより、公開スタジオも行われており、一般の人々もこのスタジオを見学することができる。このスタジオは様々なタイプの芸術作品を紹介する機会と場所を地域の人々に提供している。なにより、アーティストたちが集うことにより、おたがいの情報交換や制作に関する良い刺激を与え合う事、まとまった情報発信ができることなど様々なメリットを有効に活用していた。(図3-5)



図3 ACAVAの外観 図4スタジオでの作品展示風景  
図5 スタジオ内の風景  
(トム・ベンソン氏による説明)

## 1-2 エジンバラにおける事例について

### 1-2-1 エジンバラ・カレッジ・オブ・アート(ECA):アート、スペース&ネイチャー (ART, SPACE&NATURE)

エジンバラ・カレッジ・オブ・アート (ECA) はスコットランドの首都エジンバラの中心にあるエジンバラ城のすぐそばにある。2011年に大学間での連携関係にあった総合大学のエジンバラ大学と合併した。本調査で訪れたのはECA内の大学院の中にあるアート、スペース&ネイチャーコース (ASN) である。

ECA発行の大学院用の大学紹介(2012)によると、ECAの大学院は次の3つの学科からなり、それぞれ細かいコースが含まれる。3つの学科とはスクール・オブ・アート (SCHOOL OF ART) とスクール・オブ・デザイン (SCHOOL OF DESIGN)、エジンバラ・スクール・オブ・アーキテクチャー・アンド・ランドスケープ・アーキテクチャー (EDINBURGH SCHOOL OF ARCHITECTURE AND LANDSCAPE ARCHITECTURE [ESALA]) であり、前述のASNはいわゆる建築学科であるESALAの中に位置づけられている。

ASNは2003年に創設された比較的新しいコースであり、2年間の修士課程(MFA)のプログラムと一年間の文学修士課程(MA)がある。学部からの流れとしてはランドスケープなどの建築系の学生とファインアート系の学生が約半数ずつで構成されており、海外からの留学生も多い。基本的な内容としては、各自の学部の専門からさらに、視覚芸術、建築、環境実践におけるアカデミックな興味を喚起するような実践的な内容である。

ASNコースにおける専攻の主眼は様々な分野の学際的なつながりをもった活動や、具体的な場所に根ざしたサイト・スペシフィックプロジェクトなどに関わること、インスタレーション・ワークなどの制作を通じて学生個人の内にある新たな能力を引き出すことである。これらの目的を踏まえた活動は、学内はもとより、学外において、また国内だけでなく積極的に国際的な関係を構築する事により、様々な場所の特性の調査をおこない作品制作やプロジェクトを行うことで実践的な活動や表現を展開していく力を養っている。

ASNの実習室はこのECAの建物の新校舎の一階にあり、入り口にはTENTギャラリーという展示室を常備していて、内部の学生の作品展や、外部からのゲストのレクチャーおよび作品展などの要請にも応えられるよ

うになっている。実習室は旧来の美術大学のように学生がスペースを分割、独占して使用するようなスタイルではなく、チームごとのプロジェクトにあわせて、スペースをシェアするようにして使用している。

おそらくこの実習室の使用様式は継続的に同じ場所で制作を続けたいタイプの学生には不向きであるが、ASNの理念にあるように環境や場所性を意識して、実践的に様々な場所に関わってサイトスペシフィックなプロジェクトなどをおこなう学生にとっては有効な実習室の使用方法であり、オープンな雰囲気を持てることができるということは学生の作品にも良い影響があるのではないかと推測される。

また、ASNでは毎年学外での積極的な実習を行っており、後述のオークニー諸島にあるピア・アートセンターでも学外実習をおこない、“環境とエネルギー”などをテーマにしたワークショップをアートセンターと共同で行っている。



図6 ECA の外観      図7 ECA のレセプション  
図8 ECA内のアート、スペース&ネイチャーの  
実技実習室

### 1-3 オークニー諸島における事例について

#### 1-3-1 ピア・アートセンター

スコットランド本土の最北部に位置するサーソー市の更に北にオークニー諸島がある。このオークニー諸島は複数の島が接近している諸島であり、唯一の空港があるカーク・ウォールヤストロムネスが代表的な街である。ピア・アート・センターはこのストロムネスの街の中にあるアートセンターである。このアートセンターはマーガレット・ガルディナー(Margaret Gardiner) (1904-2005) という作家、平和活動家、慈善家である女性が自身で収集した美術作品を1979年にオークニーの島に寄贈することで創設された。彼女のコレクションはイギリスのコンウォール北海岸のセントアイヴスに居を構えていた著名な抽象彫刻家のバーバラ・ヘップワース(Barbara Hepworth)や抽象画家のベン・ニコルソン(Ben Nicolson)、その友人であるアーティストたちの作品で構成されており、イギリスの近代美術を識る上で非常に貴重なものであり、文化的に価値の高いものであった。つまり一人の作品収集家がイギリスの南端にあるセントアイヴスと北端に位置するオークニーを文化的な作品によって結ぶという英断によって過疎の進む離島の街に大きな文化的な遺産を意識的に移植した。この行為はオークニーの市民にとって願ってもないことであったし、この文化的な大手術のおかげで、漁業を主な産業とする街にあらたな種が撒かれたのであった。

そもそもこの島には5000年前の遺跡など考古学的に価値のある遺跡群が数多く、かつてスカンジナビアのヴァイキングが北海を通じて定着していた遺跡もある。遺跡として最も有名なものの一つにブローガー環状遺跡(Ring of Brodgar)があり、遺跡巡りの観光客には人気のある場所であったが、このような土地柄もマー

ガレット・ガルディナーが作品を寄贈するきっかけとなったのではないかと推測される。

彼女はコレクターと呼ばれることを嫌っており、バーバーラ・ヘップワースをはじめとするアーティストと親密な友人として関わる関係があってこそその作品所有および、支援であることを強調していた。このような気骨のある人であったからこそ上記のような独創的な作品の寄贈が行われたのだと思う。

このピア・アートセンターは2007年に建築事務所REIACH AND HALL ARCHITECTSにより増設および再開発されてリニューアルオープンした。オリジナルの建物部分を生かしつつ、シンプルかつ骨太なデザインのアートセンターになっており、パーマネント・コレクションとなった寄贈作品を十分に生かして鑑賞できるような体制が整っていた。(図9-図14)



図9 ピア・アートセンター外観

図11ピア・アートセンターの展示室

図13ストロムネス近郊の列柱遺跡

図10ピア・アートセンターの入り口

図12ピア・アートセンターの増築部分

図14ストロムネスの街並み

### 1-3-2 ヨーロピアン・マリーン・センター(EMEC)

ヨーロピアン・マリーン・センター(EMEC)は前述のピア・アートセンターと同じ町にオフィスがある。このEMECでは海洋資源をつかった潮流発電のヨーロッパでの実験基地として近年注目を集めている。すでに多くの大企業が将来性のある再生可能エネルギーとして潮力に注目しており、そのための実験プラントをオークニー諸島のいくつかの場所で試験運転している。今回の調査ではEMECオフィスで実験内容についての説明を聞く事ができ、実際の実験場所にも行く事ができた。潮流発電の方式については水面を利用する波力発電と海底に設置する形の潮流発電があり、どちらも効率のよい発電方式をもとめて様々なタイプのプラントを実験している最中であった。発電に関する詳しい内容については企業秘密の部分がまだ多く、写真撮影できない場所もあった。ピア・アートセンターの学芸員の方に案内されて訪れた実験所である海岸では、プラントの本体は海中にあり、現物を直接見ることは難しいのだが、建築中の電源設備については見る事ができた。現場は非常に風光明媚な場所であり、環境を壊さないように建物は地中にうまく収まるような形に設計されていたのが印象的であった。

このEMECができたために、オークニー諸島の町は新たな産業のために人口が増えつつあり、今後の産業的な発展が予想される状況であった。また、前述のECAのASNの学生が参加するワークショップがピア・アートセンターで行われるなど、この地域のユニークな地域性を生かした美術活動がすでに始まっており、今後の文化的な発展も期待される。

(図15-図18)



図15 EMECのオフィスがある建物外観

図17 EMEC内に飾られた潮流発電装置の写真

図16 EMECの看板

図18 ストロムネス近郊の潮流発電実験サイト

## 2. 考察

地域社会における美術関連機関がどのように連携して、地域の活性化の寄与できるかという命題のもと始められたこの調査だが、今回のイギリスでの調査で新たに気づかされた内容として、環境をいかに意識して社会のインフラを再整備するのか、またソフト面でもその内容をいかに取り入れて、市民への意識を喚起するのかについて考えることとなった。ロンドンのテート・ギャラリーのグリーン部門の例にみられるように、

美術館が率先していかにエコロジーの問題に意識をむけ、努力目標を掲げて組織運営や展覧会運営をおこなっていくのか、また、市民にその内容をいかに伝えて行くかなど今日的な問題に取り組んでいる様子が参考になった。

この視点は日本においても、個別の美術や芸術に関する内容以外にも環境政策をいかに実践しているのかという観点でそれぞれの美術関連機関が連携するという方法もあるのではないかというアイデアを得た。また、本来の企画展示の内容の中にもこの環境に関する内容を盛り込む事によって、ジャンルの違う美術機関同士の連携が可能なのではないかと思う。さらに、エジンバラ大学のECAの例では、従来のように取り扱う素材や様式を基盤に考えた美術学部のコースではない、新たなコンセプトのASNなどのコースがあった。科学や芸術など、現在では分断されたジャンルをつなぐようなワークショップを、地域のアートセンターを介在して行うなど、学際的な活動は今後も必要とされるであろうことを再確認した。

ロンドンにおけるACAVAのアーティストスタジオなど、大学を卒業したあとの芸術家が地域で安定的に創作活動を続けていけるように用意されたスタジオの存在は、アーティスト個人にとってのメリットの他、オープン・スタジオなどを通じて芸術家が多く集まる地域として、地域の活性化にも寄与している一面も見た。

さらに、ピア・アートセンターの創立のために自分の貴重な作品コレクションをスコットランドの最北の場所の一つのオークニー諸島の町に寄贈したマーガレット・ガルディナーの例は、一個人が明確な意思をもって価値のある美術作品を必ずしも縁のない場所に移植することによって新たな縁が発生すること、またそのことが、地元の文化的、経済的な発展に貢献することになっていることの成功例として確認しておきたい。

## おわりに

ヨーロッパにおいてイギリスは近代化をいち早く成し遂げた国であり、工業化の弊害としての環境汚染についての対応、環境に関する配慮の歴史は長い。現在のヨーロッパではロシアのチェルノブイリ事故後、大きな被害を被ったドイツやスイス、北欧の国々が環境問題について再生可能エネルギーの活用等、先進的な政策を国策として行ってきた。イギリスでもこのような動きは世論として高まっている。3.11以降の日本において、イギリスでの事例は今後の地域の開発例として具体的な参考になると思う。また、他のヨーロッパの先進事例も今後の課題として調査してゆきたいと考えている。

## 付記

本稿の作成にあたり、安原雅之氏に同行いただきました。全体のコーディネートをアラン・ジョンストン氏、ロンドンではデビット・コナーン氏、エジンバラではロス・マクレーン氏、オークニーではアンドリュー・パーキンソン氏に各機関への連絡および調整をいただきました。また、次のフィナオ・キングスマン氏、ジュディス・ネスビット氏、ダンカン・スミス氏、トム・ベンソン氏、横溝静氏、塚田純子氏、エマ・ウィリアム氏、エイリン・リンクレイター氏、ニール・フィッシュ氏、ユカ・ジョンストン氏、スエン・ジョンストン氏の他、多くの方々にご協力いただきました。この場をかりて御礼申し上げます。

## 注

(1)本研究は文部科学省科学研究費助成によるものである。基盤研究(c)、「地域活性化のための美術連携事業の調査研究」、課題番号:22520138、研究者代表者：中野良寿、分担者：福田隆眞、上原一明、研究協力者：安原雅之ほか

## 参考文献

- ・ECA EDINBURGH COLLEGE OF ART 2012 postgraduate-degrees,Edinburgh-Inspiring Capital,2012.
- ・Artist' s studios: creating public benefit two London case studies AAVA Blechynden Street

studios APT studios at Harold Works, Susie O' Reilly, Capital Studios-the London Artists' Studios Development Programme, 2007.

## 関連ウェブサイト

- Tate Britain 公式サイト <http://www.tate.org.uk>
- ACAVA Blechynden Street Studios  
公式サイト <http://www.acava.org/studios/building/blechynden-street-studios>
- ECA ASN 公式サイト <http://www.asn.eca.ac.uk/respond.htm>
- Pier arts center 公式サイト <http://www.pierartscentre.com/index.html>
- Orkney Islands Council 公式サイト <http://www.orkney.com/life>
- EMEC Orkney 公式サイト <http://www.emec.org.uk>